

2012 年度 武蔵大学の創造的な教育実践

1. はじめに

西村 淳子 (2012 年度 FD 実施委員長)

「武蔵大学における FD 活動の基本的方針と課題」において、武蔵大学の FD 活動は、「教育活動改善の総体」と定義されています。そして、その任務の一つとして、「個別に取り組んできた教育改善の実践を FD という視点から再評価し、それらの実践を伸ばしつつ新たな活動を開発する」ことが挙げられています。

武蔵大学は本来、少人数教育を謳い、個々の教員が、授業、学科、学部単位で、数々のユニークな教育の工夫を行ってきました。したがって、「創造的な教育実践」を探すと、枚挙にいとまがありません。しかし、FD 活動において求められているのは、ユニークな教育実践を、それを実行している人や場だけのものとするのではなく、外部の目で考察し、現場にフィードバックすることにより、一層よいものにしていくことです。同時に、当事者には当然のようになってしまっている良質でユニークな教育活動を外部から見つけ出し、紹介することにより、一人一人の努力を武蔵大学の共有財産とすることができるのです。

本年度クローズアップしたのは、たくさんの候補のうちのごく一部でしかありません。ご多忙の中、取材にご協力いただいた先生方、職員、学生みなさまにお礼申し上げます。特集の取材は FD 調査員の新宅広二氏にお願いいたしました。外部の方の方が、客観的な目で武蔵大学の教育を見ていただくことができるからです。他大学の FD 活動を取材し、同時に武蔵大学の教育活動を考察していただきました。FD 活動というのは定義や活動が多様であるため、進むべき方向を見失いがちですが、FD 活動の本質を十分に理解し、調査と報告を行ってくださったことを心から感謝いたします。

2. 学部横断型課題解決プロジェクト

人文学部教授 平林 和幸（運営チームリーダー）

2011年度の『武蔵大学FD活動報告書』では、「学部横断型課題解決プロジェクト」の特徴を「開かれた」というキーワードによって紹介しました。今回は平成24年度に行われた授業をもとに別の角度からこの取り組みについて報告してみたいと思います。まず、平成24年度の履修者数について考えてみたい。平成24年度の履修者数は下記の通りとなっています。

(1) 履修者数（前学期+後学期=86名）

学科名	平成24年度前学期 (全員3年次生)	平成24年度後学期 (2年次以上)
経済学科	4名	5名(2年生)
経営学科	5名	4名(2年生)
金融学科	6名	3名(2年生)
英米比較文化学科 ／英語英米文化学科	4名	4名(2年3名、3年1名)
ヨーロッパ比較文化学科 ／ヨーロッパ文化学科	4名	4名(2年3名、3年1名)
日本・東アジア比較文化学科 ／日本・東アジア文化学科	6名	7名(2年5名、3年2名)
社会学科	11名	8名(2年4名、3年4名)
メディア社会学科	5名	6名(2年4名、3年2名)
合計	45名	41名

履修者数の合計は86名となっています。本来は、課題提供企業は前学期4社、後学期4社で合計8社、1企業当たり15名として、計120名の履修者を予定していましたが、約30名の不足となり、前学期3社、後学期3社となってしまいました。

以上のことから、まず履修者をどのようにして確保するのが現状における最大の課題といえます。平成25年度のガイダンスには、各学部の先生方の協力もあって、100名近い学生が参加してくれました。その結果、経済学部、人文学部の予定履修者数はほぼ確保することができました。各学部の先生方の協力、既修者による口コミ、学内における本ゼミの宣伝等が履修者確保の要因といえるでしょう。

他方、学生側からの要件としては、アルバイトなどの勉強以外の時間的拘束から、授業時間以外の活動が必要である本ゼミへの参加に躊躇するきらいがあります。また、本ゼミでの活動が苛酷であるという風評から履修を控えるという学生がいることも事実のようです。こうした問題は、本ゼミだけでなく、武蔵大学全体の問題として今後考えていかなければならないと思います。

次に、平成24年度履修生による自己評価について言及してみたい。本ゼミの特徴として、経済産業省が推奨する「企業が求める能力」、すなわち「社会人基礎力」をベースに各履修者が本授業によってどれだけの能力を伸ばすことができたかを数値によって明示してきました。以下が平成24年度履修生による社会人基礎力の事前と事後の自己評価数値です。

(2) 社会人基礎力の事前・事後自己評価【平成24年度履修生】(学生による自己評価)

カテゴリー/要素		事前評価	事後評価	差異(事後-事前)
通年⑫要素平均		6.92	8.21	1.29
1. 前に踏み出す力(通年)		6.30	7.71	1.41
①主体性	前学期	7.04	7.80	0.76
	後学期	6.98	8.34	1.37
	通年	7.01	8.06	1.05
②働きかけ力	前学期	5.84	7.47	1.63
	後学期	5.71	7.66	1.95
	通年	5.78	7.56	1.78
③実行力	前学期	6.13	7.36	1.23
	後学期	6.10	7.68	1.59
	通年	6.12	7.51	1.40
2. 考え抜く力(通年)		5.67	6.96	1.29
④課題発見力	前学期	6.20	7.53	1.33
	後学期	6.34	7.68	1.34
	通年	6.27	7.60	1.34
⑤計画力	前学期	5.67	6.24	0.57
	後学期	5.61	6.54	0.93
	通年	5.64	6.38	0.74
⑥創造力	前学期	5.36	6.84	1.48
	後学期	4.83	6.95	2.12
	通年	5.10	6.90	1.79
3. チームで働く力(通年)		6.80	7.81	1.01
⑦発信力	前学期	5.96	7.27	1.31
	後学期	5.93	7.66	1.73
	通年	5.94	7.45	1.51
⑧傾聴力	前学期	6.87	7.76	0.89
	後学期	7.17	8.44	1.27
	通年	7.01	8.08	1.07
⑨柔軟性	前学期	7.16	8.02	0.86
	後学期	7.22	8.15	0.93
	通年	7.19	8.08	0.90
⑩状況把握力	前学期	6.38	7.76	1.38
	後学期	6.56	7.93	1.37
	通年	6.47	7.84	1.37
⑪規律性	前学期	7.53	7.53	0.00
	後学期	7.88	8.12	0.24
	通年	7.70	7.81	0.12
⑫ストレスコントロール力	前学期	6.64	7.71	1.07
	後学期	6.37	7.44	1.07
	通年	6.51	7.58	1.07

社会人基礎力のうち、向上したものと向上しなかったもの。

※平均値の差が事前と事後でもっとも大きかったものと小さかったもので算出。

<前学期>

	1位	2位	3位
向上した 社会人基礎力	働きかけ力 (1.63)	創造力 (1.48)	状況把握力 (1.38)
向上しなかった 社会人基礎力	規律性 (0.00)	計画力 (0.57)	柔軟性 (0.86)

<後学期>

	1位	2位	3位
向上した 社会人基礎力	創造力 (2.12)	働きかけ力 (1.95)	発信力 (1.73)
向上しなかった 社会人基礎力	規律性 (0.24)	計画力 (0.93) 柔軟性 (0.93)	

向上した能力で「働きかけ力」と「状況把握力」は、対人関係にかかわるもので、向上しなかったと自己評価している主な能力は作業遂行にかかわるものといえます。また、「創造力」に関しては、過去においては数値が低かったのですが、今年度は向上したと答えた学生が多くなったことは特筆に値します。向上しなかった能力が作業遂行にかかわるものであったということは、本学の学生がグループでの作業に慣れていないからなのではないかと思われます。

以上が平成24年度の履修学生から見た「学部横断型課題解決プロジェクト」の偽らざる姿といえます。

最後に、最終報告会でのエピソードを紹介して本報告書のまとめとしたいと思います。昨年12月に行われた最終報告会では、履修生の父母にも案内状を送付し、学内外からの多くの参加を得ることができました。そんな中、履修生が日記に、「母親が『こんな授業があるなんて、すごくいい大学だね』と言ってくれたことが、私はすごく嬉しくて今でも忘れられない」と書いていました。またその学生が同じく日記に「私は今まで志望校でない武蔵に通うことになんともなく劣等感を感じていたが、自分が武蔵の学生で良かったと感じた」と書いてあり、それに対するコメントで数人の履修生が賛同していました。



授業風景



最終報告会の様子

3. ゼミ大会（経済学部）

経済学部准教授 古瀬 公博（ゼミ大会運営委員）

武蔵大学経済学部では、ゼミ活動の成果を発表する場として、毎年12月第2週にゼミ大会を開催している。主催はゼミナール連合会という学生団体であり、教員はそのサポートをするのみである。企画、関連部署との折衝、スポンサー集めなどの活動をすべて学生が行っている。ゼミ大会には、2 - 3 学年のゼミが参加可能であり、日頃のゼミ活動の成果を報告する場として、ゼミ大会は重要な位置を占めている。

2012年度は、28 チームが参加し、8 ブロックに分かれて、優勝を競い合った。教員審査員（2名）と、OB・OGの社会人審査員（2名）によって審査され、優勝ゼミと準優勝ゼミには賞金が授与される。優勝・準優勝ゼミを発表する懇親会は毎年大きな盛り上がりを見せる。発表のアナウンスには大きな歓声が起こり、嬉し涙や悔し涙を流す学生もいる。ゼミ大会で優勝することは学生にとって大きな目標となっている。もちろん、ゼミ大会での審査員による評価が絶対的なものではなく、それは一つの基準にしか過ぎない。しかしそうであっても、ゼミ大会という大きな舞台で、審査員の教員、OB・OGの厳しい評価に耐え、研究内容を報告することは学生にとって有意義な経験となり、ゼミ大会を目標にすることでゼミ活動での大きな教育効果が期待できるのである。

経済学部においては、2 - 3 学年を対象としたゼミ大会が開催されているものの、他学部で行われているような4年生を対象とした卒業研究の報告会は企画されていない。各教員が個別に報告会を開催しているのが現状である。経済学部では、2011年度入学者から4年ゼミが必修化されたので、今後は、卒業研究を報告する機会をどのように設けていくかが課題である。



2012年度ゼミ大会・参加ゼミ一覧

ブロック名	発表順	ゼミ名	テーマ
経済A 国際経済・経営	1	杉本 A	インパウンド観光
	2	板垣 2	メディカルツーリズム
	3	二階堂 2	発展途上国についての研究・分析とそれに基づく提案
	4	黒坂 2	来月の為替レートはこれで決まる
	5	東郷 2	途上国経済
経済B 国際経済・経営	1	東郷 1	途上国経済:世界の所得格差は拡大しているか?
	2	板垣 1	国際経営:世界に進出する企業についての考察
	3	下川 1	TPPのメリット, デメリット, ゲーム論的分析
	4	二階堂 1	アジア諸国の経済発展と人口動態の関係
	5	黒坂 1	「欧州債務危機」が日本経済に与える影響について
経済C	1	後藤 2	農業で儲かるには? 脱サラ農家の視点から考察する
	2	松川 B	エコフィード
	3	河合(栞田) 1	現在の家族と未来の家族
	4	吉田 2	財政政策が家計の効用に与える影響
経営A	1	黒岩 1	リア充な生活を送るためのネットワーク
	2	高橋 1	コミュニティビジネスの担い手を育成するためには
	3	米山 1	リポジショニング
	4	松島 1	世界各国の貧困層にむけた入浴施設を建設するBOPビジネス
経営B	1	黒岩 2	大学生に向けたオレンジジュースの新たな販売提案
	2	古瀬 2	通販市場における消費者行動と経営戦略
	3	杉本 B	社員ひとりひとりのモチベーションを向上させよう
	4	尾上 2	資生堂の香水事業の新しいマーケティング戦略の提案
金融A	1	茶野 2	リスクマネジメント
	2	徳永 2	経営者と企業価値
	3	神楽岡 2	リアルオプションによる学歴別生涯評価
	4	大野 2	高齢化社会の資産運用
金融B	1	安達 A	株式投資
	2	神楽岡 1	ギャンブラーのリスク選好
	3	茶野 1	リスクヘッジとは
	4	大野 1	さまざまな分野の国際金融
会計A	1	海老原 2	資産除去債務:資産除去債務情報の開示と資本市場
	2	荒田(木村) 2	負債の時価評価
	3	目時 1	管理会計の視点から見る商店街の実態と課題
	4	目時 2	社会問題解決型組織における経営上の課題

注)ゼミ名横の1, 2という数字は専門ゼミ1部(2学年), 2部(3学年)を表している。また, A, Bは縦割りゼミ(2, 3年合同ゼミ)を表している。

4. 卒業論文報告会（人文学部）

人文学部教授 小川 栄一（人文学部教務委員長）

人文学部では3学科ともに卒業論文を必修にしています（英米比較文化学科の英語コミュニケーションコースでは英文エッセイを執筆する）。その成果報告の機会として、毎年1月末に「卒業論文報告会」が開かれています。今年は1月30日（土）、学科ごとに3教室に分かれ、それぞれすぐれた卒論（英文エッセイを含む）を書いた学生8～10名が発表しました。専任教員や4年生はもちろん、非常勤講師や3年生以下の学生も参加して、質疑応答の時間には学会の研究発表さながらに白熱した討論が行われました。

以下に学科ごとに卒論報告会で発表されたタイトルの一部を紹介しましょう。各学科ともに多彩な内容で、変化に富んでいます。

英米比較文化学科

Issues in Japan's Water Supply — Lessons from Australia's Policies and their Effects —

アメリカ合衆国の連邦制成立をめぐる議論

日本人向けリゾート地グアムの観光史

17世紀英国におけるコーヒーの繁栄と衰退 — コーヒーがもたらした近代化 —

ヨーロッパ比較文化学科

近代フランス語における明晰さの誕生 — ヴォージュラ —

ジャンヌ・ダルクから見る「聖女」と「魔女」

ワーグナーのオペラ『さまよえるオランダ人』とその演出の変遷

ムッソリーニと文化政策—大衆教化の装置としての建築—

近代における田園都市—ロンドン、パリ、東京の比較研究—

日本・東アジア比較文化学科

刺青とタトゥー そのイメージを巡る日欧比較

『人間失格』の小説構造について — 「私」と「マダム」の存在—

ネットスラングの意味理解と使用に関する意識調査

戦国期京都における川・堀の石積み護岸

益田天満宮祭について

韓国コンテンツ産業の発展からみるグローバル戦略

学生にとって卒論は卒業に向けた最大の難関です。卒論の内容は専門的・学術的なレベルを満たすことはもちろん、400字詰め原稿用紙で50～100枚以上、書式や文体、参考文献の引用のしかたなどの形式面も専門論文並みの水準を要求されています。学生はこれだけのことを就職活動や教育実習などと平行して進めなくてはいけないので大変です。卒論が書けそうもないといって悩む学生も決して少なくはありません。しかし、これを必死で乗り越えないと卒業はできません。卒論は4年間の学修の集大成であるだけでなく、建学の三理想の一つ「自ら調べ、自ら考える」力をつけるためのまたとない教材でもあります。卒論の壁を乗り越えて、専門知

識を学び、学術的な文章を書く技術を身につけることは社会生活を営む上でも大いに役立ちます。

卒論のレベルは総じて高いものです。これは学生の努力によることが大きいのはもちろんですが、卒論を指導するカリキュラムが充実していることにも一因があります。人文学部では「ゼミの武蔵」にふさわしく、1年次から基礎ゼミナール、2・3年次には専門ゼミナールなど、複数の領域にわたって充実したゼミの授業を学びます。これで基礎的な学力をつけておいて、さらに3年次からは本格的な卒論指導が始まります。具体的には3年次に卒業論文準備ゼミナール、4年次に卒業論文ゼミナール（必修）を履修します。（基礎教育センターや教職課程所属の教員の下で卒論を書く場合にはテーマに応じて自然科学演習、身体運動科学演習、教育学演習、心理学演習のいずれかを履修します。）このように充実したゼミにおいて、学生は各自のテーマについて、担当の教員から資料の分析のしかた、論の組み立て、文章の書き方などについて懇切丁寧な指導を受けます。それまであまり勉強に熱意を持てなかった学生も、卒論と真剣に向き合って、自分のテーマを持つようになると俄然熱心に研究を始めます。本当に自分がやりたい勉強を見つけたことになるからです。卒論指導の授業、卒業論文ゼミナールにおいては学生一人一人の研究報告が行われます。学生も自分のテーマを持って必死に取り組んでいるので、他の学生の発表をも批判的に聞いて、自発的に質問をするようになるので、相当に活発な質疑応答が行われています。

卒論への取り組みは就職活動にも役だっています。面接の中で、大学ではどのような勉強をしたか質問されることが多くあります。人文学部では3年次から卒論指導を行っているので、卒論のテーマについて語れば自分の学業を強くアピールすることができるので有利だからです。また、卒論を出発点にして大学院（武蔵のみならず他大学を含む）に進学して研究者や教員、学芸員などを目指す学生も多数出ています。専門家にならない学生にとっても卒論はよい思い出になっています。卒業式の日、卒論の難関を乗り越えた学生は、晴れ晴れとした笑顔で卒業していきます。

人文学部では、卒業論文報告会の発表者のほかにも数名の学生を加えて、卒論の要旨をまとめた『卒業論文成果報告書』を毎年発行しています。この報告書をご覧になれば、学生の到達した高いレベルがおわかりいただけるでしょう。また、卒業生全員の卒論タイトルは『武蔵大学人文学会雑誌』に毎年掲載されます。これは学生にとってよい記念です。武蔵以外の大学では、人文系の学部でも卒論を課していない大学、必修としていない大学は少なくありません。学生の学力低下が叫ばれる今日、わが人文学部ではあえて困難な課題を与えることによって学生の学業レベルを高め、そのための努力を重ねていきます。卒論の完成は学生にとっての成果であることはもちろん、人文学部における教育の成果でもあるからです。

5. シャカリキフェスティバル（社会学部）

社会学部准教授 矢田部圭介（シャカリキフェスティバル担当）

シャカリキフェスティバルは、社会学部の卒業論文・卒業制作の成果を発表するための機会として2009年度からはじまり、本（2012）年度で第4回となりました。「シャカリキ」という言葉には、「社会学の力」という意味と「がむしゃらに頑張る」という意味とがこめられています。また、競うというよりも、多様な成果をおたがいに披露しあう場という意味合いをこめて「フェスティバル」と名づけられています。

本年度のシャカリキフェスティバルは、2013年1月30日（水）に、新しくなった1号館の大教室を利用し開催されました。3つの会場（1101・1001・1002）で、それぞれ3部会ずつ合計9部会が開催され、卒業論文20点、卒業制作13点、あわせて33点の発表と質疑応答が行われました。卒業論文は、社会学科・メディア社会学科の各4年ゼミから1点ずつが代表として選抜されています。卒業制作は、点数自体が少ないこともあり、すべての成果が発表されています。

今年度の参加者は、3年生を中心に約450人ほどでした。また、今年度より、学外にも開催告知をし、平日の午後にもかかわらず、ご父母や教育機関関係の方など10名ほどにご参加いただきました。

参加者は、それぞれの興味関心にもとづいて部会を選んで参加し、各々の発表に耳を傾けていました。開催された部会と発表者および発表タイトルは別表のとおりです。

A. 1101 教室（卒業論文）		
街と人 (司会) 武田尚子	森・内藤ゼミ	観光都市京都の「京都らしさ」の再生産
	松本ゼミ	池袋にみる オタク女性のイメージと実像
	江上ゼミ	消費社会における百貨店の役割——ボードリヤールの消費社会論から
共に生きる (1) マイノリティとボランティア (司会) 中西祐子	矢田部ゼミ	おもちゃドクターの「語り」から読み解く「生きがい」
	粉川ゼミ	拡大教科書から見たボランティアの情報発信について
	菊地ゼミ	教育現場におけるトランスジェンダーの理解の必要性
共に生きる (2) 働く・暮らす (司会) 菊地英明	山寄ゼミ	セクシュアルマイノリティの関係形成に関する一考察——E. ゴフマンのスティグマ論を中心に
	橋本ゼミ	若者の雇用実情——“不幸な時代”に生まれながら、なぜ若者は“幸福”なのか
	中西ゼミ	待機児童の現状——保護者の真のニーズを考える
	大屋ゼミ	人とペットの関係からみる日本の家族・対人関係——共生する社会をめざして

B. 1001 教室（卒業論文）		
観る・聴く (司会) 山寄哲哉	山下ゼミ	映像の共視聴における感情の変化の違い——心理学実験とは
	藤森・中橋ゼミ	映画館という空間の非日常性——人はなぜ映画館に行くのか
	南田ゼミ	全ての音楽に目を向けて
実態に迫る (司会) 南田勝也	イシゼミ	AKB48とメディアは結びつくのか——48現象の構造に迫る
	栗田ゼミ	アイドルとアイドルファンの変遷——アイドルブーム社会学
	小玉ゼミ	応援団の社会学
いくつもの リアリティ 現実 (司会) 山下玲子	千田ゼミ	冗談と皮肉の現代的対抗理論——空飛ぶスパゲッティ・モンスター教の逆襲
	小田原ゼミ	空間と距離——実空間とネット空間のパーソナル・スペースを考える
	永田ゼミ	「AR観光」——AR(拡張現実技術)の観光産業への導入
	武田ゼミ	『こち亀』社会学

C. 1002 教室 (卒業制作)		
遊ぶ・働く (司会) 粉川一郎	松本ゼミ	子供向け教育用カードゲームの制作
	藤森・中橋ゼミ	ホラー映画から見る 3D の有用性
	永田ゼミ	本屋さんの社会学——居場所としての地域書店のカタチ
	藤森・中橋ゼミ	好き！を仕事に——銭湯絵師 中島盛夫さんと私
探す・見つける (司会) 松本恭幸	イシゼミ	脱セルフポートレート ——あなたとわたし 写真作品
	永田ゼミ	私をつくる言葉
	永田ゼミ	「色をみつけた、わたし」 ——社会における色彩の意味とその役割
	永田ゼミ	父をさがしたけど
出会う・気づく (司会) 小玉美意子	イシゼミ	絵本：ちゃこの足ばなし
	永田ゼミ	江古田の魅力を活かした地域コミュニティづくり
	永田ゼミ	石巻の人々と幸福感
	永田ゼミ	私の人生の先輩——練馬・つくりっこの家
	永田ゼミ	ひかりの輪のひとつと——私が体験したオウム後継団体

このシャカリキフェスティバルは、とくに、3年生にとっては、ちょうど具体的に準備を始めたところの卒業研究のゴール地点を見定めるために、非常に重要な機会になっています。それだけに、終了後に回収されたコメントシートからは、「卒業研究のテーマを決めるのに役に立つ」「自分の卒業研究のテーマに近く参考になった」「もっと詳しく調査の方法について聞きたかった」など、自分がこれから携わる卒業研究にひきつけたコメントが多くみられました。

また、参加した1・2年生からは、「さまざまな題材の卒業研究があり、着目する点や視点が興味深かった」「調査研究するには仮説の立て方や実証の仕方、結果の出し方など、1つの作品をつくるのに難しい面がたくさんあることもわかった」など、まだ漠然としている卒業研究の見直しに対して、具体的なイメージを持つことができたというコメント寄せられました。そして、「4年生になったら、この場で発表できたらなあ」というコメントに顕著なように、卒業研究へ向けた動機づけを高める効果も果たしているようです。

シャカリキフェスティバルの効果は、もちろん、教員にも及んでいます。3・4年生が持ち上がりで2年間同じゼミに所属する社会学部の制度では、自分のゼミの学生以外の卒業研究の内容や、同僚の教員のその指導の仕方に触れる機会は必ずしも多くはありません。このため、シャカリキフェスティバルで、自分のゼミ以外の学生の、卒業研究の内容、調査や制作の過程、発表の仕方、そしてそこから読み取れる、他の教員の指導方法や指導内容に触れることができるのは、非常に貴重な機会だと言えるでしょう。私自身も、シャカリキフェスティバルでの発表を聞きながら、「このテーマにはこういうアプローチを指示することもできるんだな」とか、「ここまでの成果を要求するには、なるほど、こういう段取りが必要なのか」など、自分の卒業研究の指導へのヒントを多く得てきました。このように、シャカリキフェスティバルは、学生の「社会学の力」だけでなく、教員の「社会学を教える力」にとっても、貴重な機会となっているといえるでしょう。

本年度で開催4回を数えるシャカリキフェスティバルは、社会学部あるいは武蔵大学の1月の定例行事として、安定した位置をえたと言ってよいでしょう。来年度へ向けて、学外広報の改善や発表点数の整理などの課題を検討しつつ、より充実したシャカリキフェスティバルの実現に向けてさらに努力していきたいと思っています。



A会場（1101教室）の様子



B会場（1001教室）の様子



C会場（1002教室）の様子

6. 特集：学生による被災地支援のための市民メディアプロジェクト

取材協力：松本 恭幸教授（社会学部）

文責：新宅 広二（FD 調査員）

<経緯と概要>

社会学部メディア社会学科の松本恭幸教授の研究室の「学生による被災地支援のための市民メディアプロジェクト」を取り上げる。

松本ゼミの有志を中心とした延べ 23 人の学生が、“東日本大震災取材しインターネットなどで発信する”という取り組みで、東日本大震災後からほぼ毎月、岩手・宮城・福島の被災地 3 県をレンタカーで訪問して、復興に向けて取り組んでいる NPO/NGO 関係者、ボランティア、地元の学校、自治体、臨時災害放送局を始めとする地元メディア関係者の方々に取材し、そのメッセージを様々なメディア（ネット、及びエリアワンセグやコミュニティ FM や CATV のコミュニティチャンネルや衛星放送向けの番組制作等）を通して全国各地に伝えるという活動を行ってきたものである。

これらの活動内容が評価され、朝日新聞に「被災地の今 学生発信」というタイトルで掲載されたプロジェクトである。

<活動を通じた教育的配慮・工夫>

松本教授によると、次のようなゼミ・デザインと教育的な工夫を配している。

①産官学連携、ネットワークの構築と継続性を実学的に学ばせる

②活動を通して学生のキャリアプランについて考えさせる

大学を拠点に市民メディアを活用した被災地支援の中長期的な活動をどのように継続していけばよいのか、また学内にとどまらず様々な NPO/NGO や企業や行政とのネットワークをどのように構築していけばよいのか、さらに毎年、被災地に関わる学生が世代交代する中で、被災地支援活動を経験した学生が、将来、企業に就職してからどのように自らのキャリアプラン（特に社会人として社会貢献活動への関わり方について）を考えればよいのか、あるいはその前の段階で何を基準に就活に取り組めばよいのか等の問題を活動の中でうまく誘導できるような指導をしている。

<効果>

東日本大震災後の日本社会の抱える諸問題と、そうした社会の中での卒業後の生き方、地域コミュニティの再生、NPO 活動、企業の CSR 活動、市民参加型ジャーナリズム等に関わるテーマで、学外の様々な現場の方をゲストに招いての公開勉強会やワークショップを、他の被災地支援関連団体等の協力も得て、継続的に、被災地支援の市民メディア活動と並行して行っているものである。

既存の大学で見られる産官学連携プロジェクトと異なる点は、活動を通してプロジェクト成果を達成目標の最優先事項にしていない点である。社会学を扱う学問領域として、実学教育を通して大学で学ぶ意義や、社会人としての準備を体験と時間をかけて自ら考えさせるような配慮が随所に感じられた。例えば上級生や卒業生を TA 的に有効活用し、活動の教育的サポートに厚みを持たせている。そして、ゼミという少数教育の副次的効果である縦の繋がりというネットワーク資産を活用できるような社会との接点の場を意識的につくっている。さらに既存のゼミ

ミの時間だけでなく、公開シンポジウムの開催や、著名人が多くライブをする新宿のライブハウスにて、学生が本テーマを発表・討論する場を設けており、企業のみならず海外の活動家などからも意見交換する機会を作っていた。特筆する点は、シンポジウムにおいて企業の社長やNPO 代表などから、活動について様々な質疑が出たが、最後に松本教授が『活動を通して得た経験を、就職や社会人としてどう活かしていくべきか?』というコメントを企業の方からコメントを取ることで締めくくり、教育目標となる重要なポイントとなる学生への意識づけの教員によるリードが随所に感じられた。こういった細かい教育的配慮が、単なる成果主義の産官学連携プロジェクトや就職するためだけのキャリア教育に陥らないような教育者としての工夫や実学教育の事例として参考にするべき点が多く見られた。



朝日新聞で取り上げられた活動の記事



学生が司会をつとめる公開シンポジウムの様子

7. 特集：江古田商店街ナイトバザール出店による経営学ゼミ

取材協力：高橋 徳行教授（経済学部）

文責：新宅 広二（FD 調査員）

武蔵大学経済学部における地域連携型のユニークな初年次ゼミの特徴と効果について報告する。

経済学部経営学科の高橋徳行教授は、「ベンチャー企業論」が専門分野、同学科の黒岩健一郎教授は、「経営戦略」、「マーケティング」が専門分野である。両氏が共同で1年生を対象としたゼミを実施している。本学科は、経営環境・社会状況が大きく変化する中で、企業はどのように経営を行うべきかを理論・応用・実践のさまざまな角度から企業について学び、企業経営を理解する力を身につけさせるという教育目標を掲げている。そのカリキュラムは1年次に教養ゼミナール、プレ専門ゼミナールというカテゴリー分けにより、4年間のゼミ生活の入り口として、本の読み方、資料の探し方、レポートのまとめ方、発表の仕方など、「自ら調べ自ら考える」ために必要な基礎的な力を身につける内容として、初年次教育としての要素も含まれている。そして、初年次の学生にとって経営学の実学教育を身近な体験を通して学問的な理解や魅力を感じさせるという試みが、本ゼミとなっている。

<地域連携を利用した実学的授業>

大学近隣にある江古田商店街で開催される「ナイトバザール」にゼミ単位で店舗出店する授業のユニークな点である。毎年秋に開催され、商店街参加団体がイベントや模擬店などを出店する。そこに武蔵大学としてエントリーし、飲食系の模擬店を出店する。1年生対象のゼミで15～20名受講者を4チームに編成する。

<授業概要>

授業評価に関しては、自己資本利益率（Return On Equity:ROE）の評価によるゼミ内チーム対抗のコンペとしている。学生にとっても身近な模擬店の出店という手法の中に、あらためて経営の楽しさを学ぶことを重視している。その中にも経営学の専門的な評価方法を導入することで、今後の4年間に繋がる学ぶ喜びに繋がるような教育的配慮がなされている。学生は、はじめてマーケティングの立案から、実践によりチームワークによる組織学、広報力、マネジメントなど初年次から経済を実体験させることにより、実学的な経営学の総合力の“気づき”につながるような誘導が教員により示されている。このようにデザインされたカリキュラムを初年次に履修することで2年次以降の専門的な学びに繋がり、より高度な卒業研究を総決算として纏められるようなロードマップが敷かれている。

高橋教授の教育コンセプトは建学の理念に則し、かつ社会人で即戦力となるキャリア教育の要素を掲げている。

- ・ 自立的に考える
- ・ 対話へのトレーニング
- ・ まとめる能力

気づきを実際に使えるような教育的配慮を教員は工夫しており、「知識を得る」ことに留まらず「知識を伝える」という人材育成を具体的に目指しており、実際に学生が企業分析する力も身につけることが出来る。

身近な地域連携の機会を教育の場に変換し、専門分野の楽しみと、専門知識の構築が両立するようなゼミのアイデアとして、初年次ゼミの在り方と専門的な高年次ゼミへの連結のカリキュラムづくりの参考となるであろう。



「江古田商店街ナイトバザール」の学生の出店の様子

8. 特集：人文学部のゼミナールを演出する教育環境の工夫

取材協力：アダム・カバット教授（人文学部）

桂 元嗣准教授（人文学部）

文責：新宅 広二（FD 調査員）

<人文学部と FD>

武蔵大学において人文学部は、他の 2 学部すなわち経済学部、社会学部とは、そのゼミにおける意味合いが異なる。後者 2 学部はより実践的な研究テーマの進め方とそれをアピールするためのプレゼン術修得に帰納するような、カリキュラム編成やカリキュラムポリシーになっている。一方、語学・異文化理解の熟達が一つの基幹となっている学問領域の人文学部では、少人数制ゼミの学術的機動力や共同体意識による社会性の形成に期待するものよりは、研究の個別指導—特に文系学部では珍しい卒業論文の必須化を維持するための、カリキュラムシステムとなっている。そういった中、人文学部の特徴的な教育環境を演出する二つの教育事例を今回取り上げた。

<1. 教材開発編>

日本・東アジア文化学科のアダム・カバット (Adam Kabat) 教授は、『近世・近代日本文学』『比較文学』等を専門分野とし、アメリカ・ニューヨーク州出身で日本の“妖怪”を通じた江戸時代の文学と風俗の研究で著名である。

今年度の日本幻想文学演習では、「日本的な美」をテーマに泉鏡花、谷崎潤一郎、川端康成、三島由紀夫を取り上げている。毎回工夫されたレジュメが使われており、学生独自の感性を大切に、解釈の多様性を引き出す活発な議論を行うのが特徴的な授業スタイルである。

人文学部の教育的特徴である卒業論文の指導には特に力点をおいている。4 年間の学問的な集大成としての位置づけだけでなく、指導を通して「人間づくり」ということを大切にしている。卒論指導は、授業時間外での教員の負担が大きくなるが、学生自身が社会に出るための自信に繋がるような“教育者”としての包容力のある指導を、個々の学生の能力、関心、性格などに合わせてきめ細かい指導が感じられる。これは、実際の方法論は異にしても武蔵大学の全教員に共通した教育理念として取り組む姿勢を感じる。

また、難解な学問領域において学問への探究心や知的好奇心を喚起する専門の導入教育の工夫がユニークである。『古文書』という日本の若者にとって自国の言葉でありながら外国語に触れるようなものである点と、若者が関心を持ちやすい『妖怪』を取り上げてテキストを作っている点である。これまでの古文書の解説書は、学術的で初学のものにとっては敷居が高いものであったのに対して、江戸時代の草双紙に登場する愛嬌のある妖怪の記述と絵を使い、くずし字を現代の外国語入門テキストのようにステップアップ式で修得できるようなものになっている。単に奇をてらったものとは異なり、学術的にも意味のある題材を上手に専門領域の導入教育に昇華し、親しみやすいテーマで難解な学問に対する学生の不安を払拭し、学生の関心を専門性に結びつける教育的なアイデアが熟慮されている。教科書や授業用レジュメなど学習支援ツールを開発する際、学ぶ楽しさ、段階的な熟達度、独習のしやすさなど授業演出をするアイデアとして新人教員などの参考になるであろう。



難解な学問領域も、親しみやすいテーマを取り扱っている



古文書も慣れ親しんでいる外国語入門書のようなつくりになっている

<2. 学習環境編>

ヨーロッパ文化学科の桂元嗣准教授は、「中欧文化論」、「近現代ドイツ文学」、「文学と経験・記憶」等を専門分野とし、ヨーロッパ文化に対する興味やイメージを持って入学した学生が、その興味を具体的な高等教育の専門性に繋げられるような接続的な教育指導が特徴となっている。具体的には、単に専門性を強化するだけでなく、学生の初心を大切に、専門テーマを自ら見つけ出す過程で、“授業のどういった点が、自分にとって面白いと感じたことなのか、それが自分のこだわりとどのように関係してくるのか”といった点を意識させる授業内容となっており、武蔵大学のゼミ特色を活かした指導方法と言える。

ヨーロッパ文学演習では、現代ドイツの作家ベルンハルト・シュリンクの小説『朗読者 (Der Vorleser)』を題材に“じっくりと現代ドイツ文学を読む”というゼミを行っている。ゼミではまず2~3人からなるグループに各章の要点をまとめ、詳細について口頭発表をさせている。学生は発表内容の不明点や自分なりに考えた点があれば、それについて意見を交わす。このゼミではさらに作品解釈のポイントとなる箇所を抜き出し、ドイツ語の原書をじっくり読ませている。学生と教員が一体となって、数々の疑問に対する答えの探究をするという授業風景が展開されている。

桂准教授のゼミでは、毎時間、授業前に机のレイアウトなどを大幅に変えて、“ゼミ空間”づくりの演出をしている。もちろん通常のレイアウトでも授業は可能なわけだが、こういった労を惜しまない細かな配慮とこだわりが、授業の様々な場面で効果を引き出す結果に繋がっている。このような少人数授業を成功させ学生の熟達度、授業満足度を高めるためには、実は『授業環境の演出』が極めて重要になっている。実際、やむを得ない事務的な教室配分の結果、授業内容に対して不適切な教室を割り当てられることがしばしばあるが、教員自身の持ち味を活かすセルフプロデュースは、そういった状況の中でも教育の質を落とさずに一定水準維持させることが可能になるアイデアである。こういった事例を柔軟に取り入れ参考にし、FDとして大学内で授業環境の演出法を発展、情報共有できるようにしていくべきであろう。



授業前、ゼミ空間づくりの作業風景



ゼミのディスカッション風景